

# 育てられている時代に育てることを学ぶ(4)

## 高等学校における保育授業実践

―市民として親性の教育―

金田 利子

大道 明里

はじめに

先回までは、二回中学校の実践を続けてとりあげました。その一つは「育っている時代に育つことを学ぶ」として、発達教育についての実践であり、次

にはジェンダーの視点から、保育を学ぶことがジェンダーバイヤスになりかねないことに視点をおき、育てることと、働くことをともに求めていく男女青年への保育教育の実践でした。

今回は、高等学校における保育教育の実践を取り

あげます。高校生は、育てられてきた自分とやがて育てる側に立つかもしれない自分との接点にいるため、中学生の時期よりは自分とはどんな親になろうかという思いも少しは出てくる時期になります。しかし、ここで考えておきたい大切なことは、保育教育は決して親になるための準備教育を意味するものではないということです。

親になるかならないかは、個人の意思決定によることが生むものに保障されている権利（リプロダクティブライツ）です。大切なのは、親になってもならなくても、すべての大人すなわち親世代に育ってほしいのは「親性」の資質なのだと思います。「親性」とも、「育児性」とも、「養護性」とも言われているが、幼い者を愛しみつつ、守り育てようとする資質、のこを意味します。この力は、異世代と発展的にかかわる力であるが、その根源は技術的な力以前に不可欠な、他者の立場に立つて共感できる

「共感性」ではないかと思われます。この力を育てる「共感性の教育」こそ、家庭科の保育教育の根源であるのではないでしょうか。

今日、「児童虐待」が深刻化してきています。また、幼いころ虐待を受けて育った親はまたわが子を虐待するという「虐待の連鎖」が問題にされてきています。それならば、どこかでその連鎖を断ち切らなければなりません。この連鎖を断ち切る上で、大きな力になりうるのが家庭科の保育教育であると考えられます。

とりわけ親世代になることを多少とも意識し始めた高校生の保育教育にはこの点についての期待が持てるのではないのでしょうか。

そこで、今回は高等学校で、やがて親世代になる「すべての高校生に市民としての親性の教育を」と意識的に実践してきている、大道明里さんに登場してもらいました。

以下は大道さんの報告です。

### 高校生とはどのような時期なのか

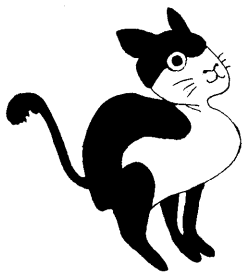
私は高等学校の教師になって九年目、現在、静岡県立長泉高等学校に赴任して二年目になります。静岡県東部の普通科高校です。男女比は六対四くらいで男子の方が多く、四年制大学の進学率は四十五パーセントほどの規模校です。素朴で人なつっこい生徒が多く、比較的のんびりした学校生活を送っています。

高校生の体の発達は乳幼児ほど明らかではないのですが、心の変化は劇的です。中学を卒業したての一年生は、まだまだ幼さが残り、自分たちが親になるということを考えたことは少ないようです。

しかし一年の冬休み前に「保育」を学習し、町内にある保育所及び幼稚園のご協力を得て「保育体験実習」を一日行なってみると、意識が大きく変わる

ようです。保育実習後の生徒の感想には子どものかわいらしさや、純粹さへの驚きを書いたり、子どものお手本になるためにがんばった様子を書いてあったりして、もうすぐ自分も大人になる段階に来ているのだということを実感する生徒が増えます。

わずか一日ですが、実際に子どもとふれあうことで親性が芽生えていく、乳幼児が高校生を成長させるというまさに生きた教育が繰り広げられます。私自身も、普段の生活では見られないような生徒の優しさや気配りなどが見られて驚きます。幼児に「お兄ちゃんはどうして靴を踏んではいているの」と聞かれてはそのままいるわけにはいきません。見本になれるように行動していました。県内の高校全てでこの保育実習が行



われているのですが、本校のように丸一日かけるところはあまりないようです。朝から夕方帰るまでずっと乳幼児の生活を見ることが出来る経験は、本当に貴重です。高校生が保育を学ぶことは高校生自身の発達を促すのだという感じますし、決して高校生に保育が早すぎるということはないのだと思います。

三年生になると、高校卒業をひかえて生活的自立を迫られたり、経済的現実を考えざるを得なくなったりして、親への感謝や尊敬の気持ちが自然と出てきます。しかしこのような成長を迎えるまでは、自立に向けて誰もが悩み苦しんでいます。思春期の自分が今どのような変化をしているのが客観的に分からず、とにかく苦しいのです。保育を学ぶことは、そのような思春期の生徒にとって自立を助ける一つのきっかけになると思います。つまり、自分の

成長発達段階を客観的に学び、これから向かう大人への意識を持つことで、ゆとりができ、壁を乗り越えられるのではないかと思います。高校時代は大人になる最後のものがきの時代です。私たち大人は、彼らをまもなく自分たちの仲間入りをする後輩のように迎えてはどうでしょうか。

### 高等学校では「保育」で何を学ぶのか

現在、本校では一、二年生に「家庭一般」という家庭科全般を学ぶ科目を、三年生の選択者に「保育」を教えています。「家庭一般」の中に「保育領域」がありますが、その他に食・衣・住生活・家庭経済・家族などあり、「保育領域」を学ぶ時間は十五時間程度というのが現状です。

「家庭一般」保育領域の内容は、青年期の生き方・生命の誕生・乳幼児の発達・子どもの成長と保育と

いう四つの内容です。また、選択「保育」では、思春期の健康と生命誕生・親の養育行動と家族・乳幼児の発育の特徴・乳幼児の発達と精神保健・乳幼児の生活・乳幼児の健康・子どもの文化と遊び・乳幼児の福祉についてより詳しく学習します。

いずれの項目においても最初に「育てられている」ことを自覚します。それを踏まえて「育てる」立場になろうとしていることを意識するという段階的な進め方になっています。子どもを扱う前に自分を振り返ることが、親性を育む重要な点です。次は「育てられている自分」「思春期の自分」を自覚する授業と、「育てる自分」を意識する授業について簡単に紹介したいと思います。

### 「育てられている自分」と「育てる自分」の授業

「育てられている自分」について学ぶ授業として、

『私の子どもの頃』というプリントを作りました。

- 1 出生時の身長、体重、安産か難産か
- 2 出身保育園・幼稚園、よくした遊びは何か
- 3 小学校就学前までに泣いた思い出は何か
- 4 名前の由来

以上の内容を生徒に書かせます。その後何人かの生徒に発表してもらいながら、生まれたときから現在に至るまでを友だちと自分を重ねて振り返ります。この四つの点を取り上げた理由というのは、出生時の身長、体重、安産か難産などを聞き、乳児の体の発達や生命の誕生について学ぶ動機付けにしたいからです。また二つ目の出身保育園や幼稚園については子どもの成長と保育というところで集団保育や子どもの遊びについて学ぶからです。さらに泣いた思い出というのは子どもの心の発達や人間関係などについて触れることにつながりますし、最後の

名前の由来については、自分の誕生を祝福してくれた親の気持ちを理解したり、生命の尊さについて考えたりしてほしいということでこの四つを選びました。

1. 出生時の身長、体重、安産・難産について

「こう見えても赤ちゃんの時は小さくて保育器に入っていました」(男子)

「ミルクを飲まないで母が心配していました」

(女子)

「双子で帝王切開だったそうです」(女子)

「吸引分娩したので頭がビヨーンと伸びてしまいみんな心配しました」(男子)

2. 出身保育園・幼稚園とよくした遊びについて

「○○幼稚園の月組でした」(男子)

「三歳まで○○保

育園で、その後○

○幼稚園にうつり

ました」(女子)

「泥遊びやおに

ごっこをしまし

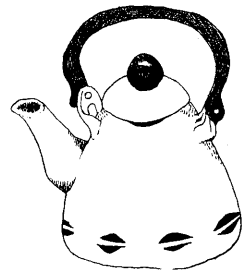
た」(女子)

「竹馬や鉄棒が好きでした」(男子)

3. 泣いた思い出について

「弟と遊んでいて、テーブルにおいてあった食器乾燥機を下に落として、中に入っていた食器が全部割れたときです」(女子)

「近所の一つ上の男の子の腕を噛んで、その子が泣いたから、お母さんにすごい怒られて泣いた」(男子)



「下水の蓋みたいな所の上を歩いていて、足が溝にはまってこけて、前歯を二本とも折ったこと」（女子）

#### 4. 名前の由来について

「やさしい子に育ってほしいという意味で優という字を使ったそうです」（女子）

「低体重児だったから健をつけて元気にそだってほしい」（男子）

「亜由美は左右対称で裏表がないからそんな子になっただけ」（女子）

生徒一人に一つずつの思い出がありました。生徒の子どもの頃を聞いていくと、やはり恥ずかしそうな様子でしたが、自分と似たような体験を聞いて思い出したり、懐かしそうにうなずいたりして、和やかな雰囲気でした。名前の由来について聞くこと

は、親や周囲の願いや自分の誕生を喜ぶ親の姿に思いを寄せることにつながっていったようです。自分が生まれこうして育っていることを、簡単な質問に答えることで感じられたらと思います。そして「育てられている」という感覚が自然とわいてきたようです。

#### 親へ手紙を書く実践

もう一つ「育てられている自分」を自覚させようとした授業を紹介します。それは自分の親に短い手紙を書くのですが、内容は全く問いません。一言何か書いて、その手紙から思春期の自分がどの程度大人に近づいているのかを知ろうというものです。いくつか紹介します。

A「お母さんへ おかげさまでもうすぐ十八歳にな

ります。まだおばあちゃんになりたくないけど運命には逆らいません。大人になってもあなたの子どもです。これからお世話になります」(女子)

B「母に あたしが家を出たら、そのうち母一人になるんだよね。口では何も言わないけどホントはイヤだよ。気付いてほしいな」(女子)

C「お母さんへ あんまりいろいろ聞かないでください」(女子)

A、B、Cの生徒は、まだ親の保護の下で内心では甘えたい気持ちを持っていたり、親を時には疎ましく思っていたりと思春期の自立にもがいている姿が見られます。

D「お父さん お母さん いつもありがとう。仕事がんばってください」(男子)

E「おかあさんへ いつも、仕事、家事と大変ですね。あたしが何も手伝わないからさらにイライラしてるんだね。私が専門学校に行くから、たくさんお金も必要だし、苦労かけちゃうね。お父さんがしっかりしてないから……。あと一年したら東京へ行ってしまうけど、あまり迷惑かけず、自分の力で生活していくよ」(女子)

F「お母さんへ 生んでくれてありがとう」(女子)

D、E、Fの生徒は、卒業をひかえいよいよ生活の自立を意識する中、毎日自分のために働いてくれる親に対しての感謝の言葉や、ねぎらいの言葉もありました。着実に「育てられてる」存在から「育てる」存在にうつりつつあるようです。自分も大人に近づいてきているので、親への思いやりや尊



敬の段階にきているといえます。

これは三年生の選択「保育」の授業です。授業を終えて生徒の手紙を読みながら、同じ年齢でもこんなにも親に対する思いが違うのかと驚いてしまいました。それぞれの「手紙」は授業で紹介し、解説を加えながら思春期のどのあたりにいるのかを考えます。

### 「育てる自分」への意識

次に、「育てる自分」を意識する授業についてです。先ほど保育の内容を紹介しました。その中で生徒が特に興味を示すのが「親の養育行動」というところです。児童虐待や育児ノイローゼ、あるいは早期教育などに関心があるようです。子どもにとっての理想の大人、理想の親を高校生なりに考えていたり、逆に問題のある家庭や親の行動には厳しい目で

批判したりします。

ここではグループに分かれて「ものがたり」を作る活動をしました。テーマを決め、子どもを登場人物に必ず入れ、最後には問題が解決されていくという条件です。生徒の考えたテーマは、小学校お受験、夫婦の不仲、忙しすぎる両親などでした。

会話形式で進められるものがたりは、最後に役割を分担して発表しましたが、生徒はいきいきと取り組みました。内容が多少稚拙なところもありましたが、思いの他楽しかったようです。子どもを登場させるのは、子どもの立場に立って問題を考えてはしなかったからです。子どもにとってどのような夫婦、家庭が望ましいだろうかと考えるきっかけになったと思います。授業後の生徒の感想では「夫婦の仲の良し悪しが子どもの心に影響していることが分かった」「親になるといっなのは子どもを生むだけでなく

てどのように育てていくのかを考えなくてはならないと思う」「子どもの立場に立って行動しなくてはならないと思った」などがありました。おおむね成功だったと思います。

以上、大変些末な授業内容ですが、生徒の親性を育てるといふ視点で実践してみました。授業をしなから高校生が変わっていく様子がとてもよくわかります。「将来子どもがほしくなった」「子どもが嫌いだったけどなぜ子どもが泣いたりわがままだったりするのかわかるとかその仕組みがわかった」などの未来への声もありました。また今の家族への接し方を振り返り、「親の大変さが分かり、もう少し家の手伝いをしたい」とか、「幼いきょうだいにやさしくしたい」などと今日家に帰ってからの自分の行動にもつながった生徒もいました。高校生にとつての保育がいかに重要なのかを、より多くの人に理解していただ

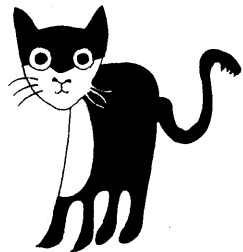
けるよう実践を続けていきたいと思います。

まとめにかえて

よくある質問に、

家庭科の教員だから食物が被服が専門ですか、というのがあります。生徒からはもちろん、職場の方でもありますが、いいえ「保育」の研究室でしたというのと、そういうのもあったのかという反応が一番多いのです。確かに幼稚園教諭の免許も、保育士免許も持っていないのに「保育」が専門だというのは理解しがたいことかもしれません。でもそのようなときは、宣伝のチャンスだと思つて簡単に説明させてもらっています。

私の専門は中・高校生に、親になつてもならなく



ても、「子どもを育てられる力」すなわち「親性」を、育てることであると。男女が出会ってお互いに思いやっっていくことの大切さや、自分と相手の人生をいきいきとさせることの重要性を若いうちに学んでいってほしい。家庭を持つ前の最後の学習チャンスに、生命の尊さを伝えていきたい。衣食住が豊かになっている中、人間そのものの豊かさが遅れてしまっているように感じます。単に子どもの育て方を教えるだけではない保育、自分も育つ保育を目指していこうと思います。(以上、大道)

### おわりに

九月の初旬にカナダで「共感の根っこ」(Roots of empathy)のプログラムを發展させているメアリー・ゴードンさんが日本に見えました。「赤ちゃんが教室にやってくる」というキャッチフレーズか

らもわかるように、赤ちゃんの教育力を活用し、年に九回月一回の出会いに赤ちゃんの発達の事実を学び、連れてきてくれる親と赤ちゃんの関係から親子関係を学びます。また、言葉で表現できない赤ちゃんの気持ちをわかって学びます。この取り組みもまさに、「親性」の教育です。

男性も女性、乳幼児期から高齢者まで、こうした共感の教育・親性(養護性)の教育は大切です。そしてこの視点に立って社会が営まれるなら、虐待だけでなく、国と国との間の戦いも回避できる道につながるのではないかと思います。

金田(静岡大学)

大道(静岡県立長泉高等学校)